



No. 109

ティー・ブレイク

## Tea Break

香りのルーツ

日本にあって外国にないもので意外なものというのは、例えば生ビールがそうである。これは、雑菌を取り除く十分な施設が外国に存在しないためであり、そこに日本の技術の高さが伺える。

同様に、缶コーヒーやアイスコーヒーというものも、基本的には日本だけで見られるものである。むしろ、最近ではスターバックスによるフラペチーノ類の販売により、アイスコーヒーの類は欧米でも徐々に見られるようになってきているが、缶コーヒーというのは、実は日本だけにしかないものである。

この缶コーヒー(特に、ミルク入りの缶コーヒー)のルーツを知るためには、神戸のポートアイランドのUCC本社の前にあるコーヒー博物館(ちなみに、ここが日本で唯一のコーヒー博物館である)に行ってみるとよい。

このコーヒー博物館というのは、2階から螺旋状に降りてくる構造となっており、コーヒーが発見されてから、世界に広まり、そして愛飲されるようになるまでのことが物語風に描かれており、また、美味しいコーヒーが出来上がるまでの苦労が視覚的にわかるようにされている。

ところで、コーヒーにはアラビカ種とロブスタ種があり、ロブスタ種は病害に対して強いが、風味の点で劣るところがあるので、嗜好性のよいアラビカ種の方が好まれている。我が国のコーヒー全体の消費量は欧米諸国に引けをとらず、特にコーヒーの最高峰であるブルーマウンテン(ジャマイカ島の高地で採れる、良質のジャマイカ種)の消費量などは日本が世界一である。

これは実は、非常に特異な現象であり、アジアの国の中で、コーヒーをここまで愛飲し、しかもその味や淹れ方にこだわりのあるのは日本人だけである。韓国や中国に行っても、いまだにインスタントコーヒーが一般的に飲まれており、例えばアジアの航空会社で出されるコーヒーは、インスタントコーヒーとミルクと砂糖のパックであり、それをお湯に溶かして飲むのが普通である。一杯一杯淹れたてのコーヒーを好み、その香りと風味を愛

し、そうでなければ飲めないなどと言っているのは日本人だけである。

けれども、緑茶はアジアのどの国でも普及しているのに、なぜ日本だけがコーヒーなのかということについて、これは非常に不思議なことなのである。よくよく考えてみれば、烏龍茶などは、原産地が近隣の中国であるにもかかわらず、流行りだしたのはここ20年ぐらいのことである。特に、缶入りの緑茶や缶入りの烏龍茶が出たのは、実は缶コーヒーよりも後のことなのである。

缶コーヒーが日本だけに存在し、アジア諸国の中では日本人だけがコーヒーにうるさい。その答えも、注意深く見てみれば、コーヒー博物館の中にある。ここで「注意深く」と言ったのは、コーヒー博物館の一部にひっそりと、その答えがあるからである。

それにしても、今であれば当たり前のように飲まれているコーヒーではあるが、その当時、緑茶しか飲む習慣がなかったこの国において、UCCの創始者である上島忠雄は、どうしてコーヒーが流行ると思うことができたのであろうか。自分などはその仕事柄、こうした「進歩性」については非常に興味を持ってこの博物館を見ていた。そして、その「業績」については「もう少し大声で言ってもよいのではないか」とも思った。

けれども、こうした業績は、コーヒー博物館の片隅にひっそりと展示されている。この「ひっそりと」というのが、いかにも愛らしく、それと同時に、一緒に行った上島さん(創業者のお孫さん)が受付で入場料を支払っていた光景が目につく。休日あまりにラフな格好で行ったため、受付嬢には「その人」であることがわからなかったらしい。そのときの私の「どうして…」という問いかけに対し、「いやあ、わざわざ口に出すのもなんなんで…」と照れたように言っていた。あの博物館の片隅の、UCC歴史コーナーの小ささが語りかけているものが、こうやって受け継がれ、冷めないまま、ほど良い芳香を放ち続けているようである。(正)